

秋葉原見学レポート



ウェルカーゼミナール

国際日本学部 日本文化学科 多田 伊吹
国際日本学部 歴史民俗学科 村岡 拓真

10時半にJR秋葉原駅に集合し、電気街や秋葉神社を見学しました。秋葉原といえばアニメやメイドなどオタク文化のイメージが強いですが、元々はパソコンのパーツや電気製品がメインの電気街でその名残を感じました。散策時にはゲームやアニメのキャラクターが大きく描かれた広告が沢山あり、ほとんどは女性のものでした。駅の近くにあるラジオ会馆ではフィギュアの展示やトレーディングカードなどのグッズが販売されていてフィギュアはほとんどが男性向けの美少女フィギュアでした。印象に残ったのは海外からの観光客の多さでした。ゼミの活動以前に訪れた時は海外の人をあまり見かけなかったのですが、今回コロナが落ち着いたこともあり日本人よりも外国人観光客の方が多く、観光客が戻りつつあると感じました。また、男性向けのフィギュアが売られている場所にも男性キャラクターのグッズが販売されていて女性のお客さんも少なくなかったことはキャラクターの文化が男女問わず大きな市場になっていることを象徴していると思います。

昼の休憩時間にめいどりーみんに入国しました。多くのゼミ生が初めてのメイド喫茶に心を弾ませている中、1人は今回の活動の前にメイド喫茶を予習してきたと言っており気合いが入っていました。エレベーターのトビラが開くと、ピンク色のかわいらしい雰囲気、の部屋と甘い香りが異世界へと迎えてくれました。めいどりーみんにおける楽しみ方やルールを確認した後、席に案内していただきました。メイド喫茶は男性の利用者が多い印象でしたが、家族連れや外国人観光客などの方々もおり、メイドさんも気さくに話しかけてくださるので比較的カジュアルな印象を持つことができました。メイドさんと呼ぶときは「にゃんにゃん」と言わなければなりません。注文方法はQRコードを読み取り、サイト上で豊富なメニューの中から選ぶというシステムでした。一番初めにできあがったのはウェルカー先生のアイスコーヒーでした。両手でハートの形を作りゼミ生11人分の「もえもえきゅーん！」が注ぎ込まれていきます。私はオムライスを頼み、ケチャップで「ワンちゃん」を書いていただきました。ペンライトを持ってライブを楽しんだ後、くじの一等を引いたゼミ生のおかげでゼミ生全員と6人のメイドさんとの記念撮影ができました。最後に自分のニックネームを決め、出入国するためのパスポートが渡されます。しかし、出国して秋葉原の街並みを見ると、やはり一般的な喫茶店とは異なるものを感じました。食べ物ではなく、あの空間にいるメイドさん中心に、そのコンセプトを消費しているのだと気づきました。トランプに遭いやすいという理由でルールやマナーを厳しくされているのも理解できます。

最後に訪れた明治大学米沢嘉博記念図書館では少年ジャンプをはじめとする大量の漫画雑誌や単行本が保

存されており、とても個人のコレクションであったとは思えないほどの量でした。漫画のために数件の家を持つていたと聞き驚きました。多くの蔵書がある中でも特に印象に残ったのは、2022年の冬に行われたコミックマーケットで発行された新刊のほとんどが保管されていたことです。私はこのコミケに参加していたので段ボールに書かれたサークルの場所は当時の様子を思い出させました。オタクの間で楽しまれていた同人誌が今では一つの文化的価値を持つ書物として扱われていてオタク的な活動はもはや趣味の領域に収まらないものになっているのかもしれない。

以上が私たちの秋葉原見学の報告になります。実際に行ったことがない方々にも秋葉原のオタク文化や雰囲気を感じていただければ幸いです。

ミュージカル「マチルダ」の観劇



マチルダのパネルと一緒に

外国語学部 英語英文学科
鈴木宏枝ゼミナール

二〇二三年四月十五日に、外国語学部英語英文学科鈴木ゼミの三年生の希望者は、東急シアターオーブでミュージカル「マチルダ」を観劇しました。参加者の感想の一部を報告します。

菊池 暖

歌を通して伝えられるメッセージ、ミス・トランチブルのアクション、ミセス・ワームウッドの社交ダンス、第二幕が始まってすぐの観客との対話などミュージカルならではの要素・脚色があり、原作との相違を見つながら鑑賞することができて面白かった。

個人的には、「ぎちぎち」に生徒を入れようとするミス・トランチブルに抗うため、クラスの皆が口々に誤ったスベルを言う場面が印象深かった。全体を通して、このミュージカルは「反抗」に焦点が当たっている部分が多く、また違った視点から物語を咀嚼することができた。この場面以外にも、マチルダがミスター・ワームウッドに「ぼうず」と言われたことに対し「女の子よ」と言い返したり、ミス・ハニーがトランチブルに対し「ちゃんと教えています」と少し声を荒らげて言い返したりしている場面も覚えている。原作を読んだ際は、マチルダは芯や意志の強さを内に隠しているように感じたし、ミス・ハニーは自身のトラウマに身を震わせているように感じたのもあり2人にここまでの強かさを感じてはいなかった。ミュージカルでマチルダは性別を、ミス・ハニーは自分の好きなことでもある、人にものを教える教師という職業を否定され、強く言い返している。原作を読んだ際にはあまり感じられなかった部分であるが、これは「反抗」に焦点が当たっているからこそ見えた面であつたのだろう。

「マチルダ」は、ロアルド・ダールがユーモア溢れる作品の中に散りばめたメッセージ性を少しずつ拾い上げて色濃くしたもののように感じた。「マチルダは小さな大天才」とはまた違った感想を抱かせてくれたし、この作品をより深く味わうための橋渡しの役をしてくれた。本当に素晴らしいミュージカルだった。

小林 亜椰

原作を読んでいたからこそ知っている場面と照らし合わせて楽しむことができたり、原作とは少し違った部分も見つけることができたりと、終始わくわくしながら観劇できました。演出や小物の使い方が世界観とマッチしていてより物語に入り込みやすかったと感じました。

白澤 ことみ

観劇に際し、事前に原作を読み、どこが脚色されたのかを比べると面白いだろうという鈴木先生の提言から、原作を読んだ状態で当日を迎えました。脚色という言葉に、私は勝手ながら、原作には基本的に忠実であり舞台化の都合上どこか省略された部分があつたり、その部分を上手く繋げたり、という意味だと思つてしまつており、実際に見ると、原作には無かつた展開がずらりと演じられ、驚くばかりでした。舞台化された「マチルダ」は、原作よりもミス・トランチブルに愛嬌がありました。演者さんの声量、音圧にはとても圧倒されましたし、とても男性演者とは思えない女らしさを感じました。

宮崎 あげは

全く知識のないまま劇を見ましたが、冒頭から圧巻でした。ミュージカルを見るのは小学生の頃から2回目でしたが、自分より小さな演者達が生き生きと演技している姿を見て涙が出ました。マチルダの家庭は自分には想像出来ないほど残酷なものであるなと思つたのですが、マチルダの自分の信念を曲げない、自分を貫く姿は自分が情けなくなるほど勇敢でした。彼女のような生き方はなかなかできるものではないと思うので（超能力とかも）、自分の中にも小さなマチルダを宿らせて正しく生活してみようと思いました。

柳 莉里子

歌もダンスも物語の雰囲気に合っていて本の物語を現実で見られた気がして楽しかったです。トランチブル校長先生を男性の俳優さんが演じることで、大きく強く怖いというイメージがよく再現されていたと思えました。そして、ハニー先生は本で読んでいた通りの優しい声でしたがすこし工夫を加えて面白い一面を入れられていてさらに魅力ある人を感じました。マチルダは本で読んでいた時のイメージよりすこし自分の意志が強くまっすぐな気がしました。マチルダの父の役を斎藤さんが斎藤さんの面白さを出しながらキャラクターに忠実に演じていてとても印象に残りました。全体を通して照明や音楽、演者さんたちの演技すべてが素晴らしくて、マチルダの物語を本で読んで楽しむのも良いですがミュージカルを見るのも好きになりました。

山田 あすか

実際に幼い子供がマチルダを演じることで、マチルダが同い年の子供たちよりも聡明であることが強調されていても良かったと思います。また、トランチブル先生が登場するシーンでは張り詰めた緊張感とその中で起きる笑いのシーンのメリハリがすごく面白かったです。役者さん一人一人の演技が加わってストーリーがより魅力的にパワーアップしている気がして最後まで楽しく観劇できました！



ミュージカルのパンフレットと
ダールの
『マチルダは小さな大天才』



観劇日のキャスト一覧